

新
118
90
(3)

醫水先生隨筆卷之十二



○北牖醫話 並雜記

醫乃病以治すのハ外科ハ本道の病者の氣をこやくこ
カと。蒸と曰ふことハ。施す可この緩急度又中るもの工拙
ニつは有る也。仕す所はあつた書物より何れ師匠ハ勿
論人より傳ハる也其筋目ありて名をなす也此とも
勿代用を自ら験す事法あり熟習せしむれば何れぬ
かり見受けおろけたる通し。このことすれば手あての
緩急決して度ニおろけたるも扱ひの度とは緩急より
急きもの急きもの急きもの急きもの急きもの急きもの
ハ得るべきものなり朝夕精神をあらし月日折るぬ

在多心契則靈病不在難意會則明といふ古語ゆゑ此
を併せ考へて可し昔よりいふべき疎漏の形勢也人醫
者の手傳ふて諸病の何れも有りしと思ふ人と考へて
見る有りし人をも醫するといふ其理を弁（如藤工
といふ）其患者に對するといふ彼が平素の情を
やく好く出れは亦く活法に其緩急の度得る
よりの精練を盡きあり内外科に在りし二ツ所存
するといふ多岐あるは亦く由るし可し然し然れども
考へたの二ツの間は亦く活法に其緩急の度得る
可し

庚申仲夏初三筆 一任也

○ 明察疾病之原因專在於精究人身之實理
自得治術之機會偏係於歷驗諸病之轉變
圓熟藥性之主功則方簡而所及充廣
撰擇適宜之良品則涉便而取効必速

○ 甲子暮春偶作二聯

○ 痘疹必用 薩州吉村扁著

○ 痘即疫邪自口鼻入于胃故嚏則出痘之期是故主清

○ 解而忌温散專用紅花其頭痛發熱面赤脉數或腹痛

○ 或吐瀉搐搦或發驚唯無惡寒者此痘疹之兆

○ 十七難 經曰病或有死或有不治自愈或連年月不已

○ 有病不治常得中醫 漢晉藝文志

○ 酒債尋常行處在人生七十古來稀

杜子美

使秋有身後名不如即時一盃酒

晉張翰

別腸 周維岳身甚小何飲酒之多左右曰酒有別腸也

代晉高祖天福八年 通鑑綱目

○ 活轉機用

○ 消渴 ウエイト經驗 武部尚二

白牛酪 天胸上施打膿発泡屢効

○ 壁代 幔の如きものとして白綿を縫ふをきり左折の

繪を画き垂れ置くものなり 坐中隔を和すの

軟障 これり似たるものなり 源氏須戸の巻に見たり

壁代り源氏の中に見也

○ 練兵日記 石南塘

○ 古人云讀書當眼到口到心是為三到余則云宜加手加

手到更名為四到矣蓋心口眼三者皆屬虛唯手寫抄書

為實事終身不忘實係手到之功為多故曰讀書不如寫

書汝宜記之亦當以此語社中兄弟

右玉山秋儀與見遜書

○ 天工開物五金鉛部

黃丹

○ 凡炒鉛丹用鉛一斤土硫黃十兩硝石一兩鎔鉛成汁下

醋點之滾沸時下硫一塊少頃入硝少許沸定再點醋依

前漸下硝黃待為末則成丹矣其胡粉殘剩者用硝石礬

石炒成丹不復用醋也欲丹還鉛用葱白汁拌黃丹慢炒

○ 金汁出時傾出即還鉛矣

○ 林麓藪澤 龍吟方澤虎嘯山丘 賦 田 皓質呈露若澤

無加 昊天降豐澤 玄澤滂流 仁風潛流 晉武帝華林園集詩

應禎 閑榮灑澤

柔撓

○ 茂矣美矣諸好備矣 朱玉神女賦

○ 諤月榘 諤誦背文曰諤以聲第之曰誦

○ 精神之於形骸猶國之有君也形特神以立神頌形以存

○ 傳子 擬金人銘作口銘曰 太平御覽口

神以感通心由口宣福生有兆禍未有端情莫多妄口

莫多言 蟻孔墮河溜沉傾山病後口入禍後口出存已

之後周闔之術口與心謀安危之源把機之券榮辱存

焉 十六句

○ 汗 說文曰汗身液也釋名曰汗澤也出其衣澤然

洩洩 說文曰洩鼻液也

言諾 說文直言曰言諾義曰諾釋名曰言宜也宜彼此

之意也諾叙也叙已所欲說述也

卧 說文曰眠翕目也寢病卧也卧休也叙名曰卧化也

其精神变化不與覺時也

寢 謚也謚靜無聲也寢侵也指事功也

臙 泯也無知泯也

肉 說文曰肱音梅背肉也脾音身夾脊肉也臄寄肉也

釋名曰肉柔也

皮膚 釋名曰皮被也被覆侷也膚布也在布表也

骨 說文曰骨解之質也肉之核也釋名曰骨堅而滑也

似木枝格

筋 說文曰筋体之力也。可以相連作用也。釋名曰筋力也。肉中之力氣中之元也。

脉 釋名曰脉幕也。絡一腑也。

髓 說文曰髓骨中脂也。

腦 春秋元命苞曰腦之為言在也。人精在腦。

血 釋名曰血藏也。流藏也。藏呼會切。

膏 春秋元命苞曰膏者神之液。神經液ニ充ツテカ。

文子曰人受變化一月而膏三月而脉

心 釋名曰心纖也。所識纖々微無物不貫也。

文子曰心者形之主也。神者心之寶也。

靈臺 莊子司馬注曰心為神靈之臺。

肝 釋名曰肝幹也。於五行屬木。故其体狀有枝幹也。凡

物以木為幹。

肺

脾 腎 雙 釋名 曰春二出不 騰素向中正之官決斷出

胃 腸 釋名曰腸暢也。言通暢胃氣也。

膈 廣雅曰膈脫謂之膈。膈釋名曰胞。鞞切。文也。鞞虛空

之言也。主以虛養水。汙也。或曰膈脫言体短而橫廣。

尻 說文曰尻尻也。誰音。釋名曰尻窾也。所在窾窄深也。

頰 說文曰頰面旁也。輔頰也。釋名曰頰夾也。面旁稱也。

亦取挾制食物也。

鼻 說文曰鼻。鼻也。葛切。

釋名曰頰鞞也。偃折却鞞也。

口 說文曰口者人之所以言食氣名曰口空也

舌 釋名曰舌洩也舒洩所當言也

唇吻 說文曰唇口端 釋名曰唇緣也口之緣也吻免

也入則碎止則免也又取投也吹唾所出恒加投拭因以為名也

齒 釋名曰始也少長之別始于此也云云亂毀齒也

楊泉物理論曰夫齒者年也身之寶也藏之斧鑿所以調諧五味以安性氣者也

喉咽 說文曰咽隘也喉嚨也經名曰咽咽物也青徐謂

之脰音豆物投其中受而下之也又謂之隘音氣所通流扼要之處也 物理論曰咽喉生之要孔

頤頷 釋名曰頤或曰輔車其骨強所以輔持其口或曰

牙車牙所載也或曰頷車頷會也

義漿 釋名曰口下曰義漿義水漿也

頸項 釋名曰頸徑也徑挺而長也說文曰頸頭莖也脰

項也

肩 釋名曰肩堅也說文曰肩膊也

胛 釋名曰胛蓋也與胛胛背相會蓋說文曰膊有胛也

春秋元命苞曰胛之言附著也云云

臂 釋名曰左傍曰裨也腕者宛屈也共釋名

腕 釋名曰腕釋也言可張翕尋釋也

說文曰脰脰下也脰脰下也 脰音各脰音香切

肘 釋名曰注也可隱注也

手 釋名曰手須也事業之所須也掌言可以排掌也

介 釋名曰介紹也筋極為介以紹續指端

胃 說文曰膏胃也臆胃骨也廣雅曰臆膏胃也 釋名曰胃猶啞之氣所衝

江切

膈 說文曰胃心上膈也 釋名曰膈塞也膈塞上下使

氣此穀不相亂也

乳 廣雅曰澶謂之乳 說文曰澶乳汁也 重音凍又竹仲切

腹 說文曰腹厚也 釋名曰腹稜也富也腹胃之屬已

自裏盛於外稜之其中多品以富者也自有以下曰水腹治所聚也又曰大腹小也比齊已上為小也易說卦

曰坤為腹離其於人也為大腹

背 釋名曰背陪也在後稱也廣雅曰背謂之體背北也

脊說文脊背胎也脊名曰脊積也積骨第結上下也

肋 釋名曰肋勒也檢土臟也

臍 釋名曰臍劑也腸端之所限制也

解 說文曰股外 釋名曰解卑也在下稱也股固也為

強固也

膝 釋名曰膝申也可屈申也膝頭曰臍臍圓也因形圓

名之

脛 釋名曰脛還也高厚有脛還也

脛 說文曰脛胫也 釋名曰脛莖也直而長似物莖

脛 說文曰脛腓脹也 脛市亮切腓非切脹直良切

踝 釋名曰踝踣踣也亦因其形踣也且後曰跟在下

曰旁着地踣聚也上體之所鍾聚也

毛 釋名曰毛貌也冒也在表所以別形貌且以自覆冒

髮也
髮 親名
髮 說文曰髮頰髮也 釋名曰其上連髮
曰髮之賓也賓崖也為面頰之崖岸 髻 說文結髮也

睫也
睫 親名
睫 說文曰睫映目傍毛也 釋名曰睫接也垂於匡而相接也

文子曰人之情慾平嗜慾亂之精氣為人人受天地變化而生一月而膏如膏形二月而脉漸佳三月而胚胚脫也水籠如水中蝦四月而胎如胎中蝦五月而筋筋積而六月成骨骨化脂肉化七月成形如形八月而動動九月而踰如動十月而生形如形乃成五藏乃形

淮南子 一月而氣二月而血三月而胎四月而胞五月而筋六月而骨七月而成八月而動九月而踰十月而生形生形生以成五藏乃形也
形體 釋名曰形有形像之異也體第也骨內毛血表裏大小相次第也

淮南子曰形者生之舍也
頭 說文曰首頭也 親名 春秋元命苞曰頭者

神所居上圓象天也氣之府也
額 釋名曰額鄂也 有垠鄂也 額 額類也 中夏謂之

面 說文曰面頰前也 從頁 音象人面形 謂之頰
眉 說文曰眉目上毛也 釋名曰眉媚也 有娥媚也

耳 釋名曰耳形也耳有一体属着兩盞形之然 融音而
目 釋名曰目點也謂點而内識也眼限也童子限之布
出也

○ 肚門痛 五倍子 一ンテイヤ 合ノ聲

○ 寔ちのくまのを学ハぬ由見ぬ秋島りをいす
め七やぶが 岩泉印代の寄

○ 道雖通不行不至事雖小不為不成 如鏡 階 登

○ 市川寛斎の後 唐鑑を彼人の漁戯と一見し
我國の能登樂のよし芝居とは大に異なりと
記事あるがし尋鑑よし

清商の楷行の如く多くと能ハず學ぶるはと見

好い 亦邦の人等其見を消腫せした、エ
拙め何の之彼商賈等の人ハ草書ハ書す、朝夕
の書習の楷楷行と見ゆると 究ん高のひき

lip 脣圍 Voor lip 脣

○ ナツスイセン 狐粧花 石蒜ノ花ノモ、イロナル者

○ 根水仙ヨリ大ニ モト鉄色竹筥ニ花タリ

○ 莢實 ミツアキ

○ 經帷子 戦陣に出る必を者用せり義負の經あり
ひりを見、重といハ人皇極帝ニ載也

○ 併在漆 漆地のありと見、た、竟承の以新老系
の漆意書は併在漆の外縫着在靴者用法な

しるし

○ おりぬ 中国より九州多しを呼ぶ多し其いふ在云
あり

○ 雲手かく初めコン在代の菓子の名

城柵ニシモテカクナリトイフモ似タルもの名あり
といふ

○ 昔のあまつり ちと菓子の製法すは糖と海

ぬきのありて後来の故これを入るは海あり
砂糖すんちうといふ

○ 法印竟東山園紀行 天明十七年秋

早槻川とるく霖雨未もれす 疏の二もをれぬ

神の秘の日月もや つき川をこける白心

○ 狂婦麻疹解熱 武傳

井底泥加伏龍肝ヲ合シ子リタルヲ其胸上ニ塗レハ熱
ヨク解散ス但コレヲ塗ルニ乍チ燥クナリ其上ニヌリ
カケクスレハ遠ニ熱解スルナリ

○ 家藏清世軒清菴先生の真容図を茂實十九の廿年

安永四五年の以先生(内容ありて私うよ心は松仲

後三年とあるは 藤白山人画才ありて先生(親
藤白山人とあり

いへ出入りの者ありて此の画像を託し多けり
其頃三年慎めりありて

後清世江戶より繪巻を志す者も同而(志す者も
後清世江戶より繪巻を志す者も同而)

先生(師覚)入れしよく由似たりとて也悦

若の所を予有、但眼眩と云ふ日振あり、忘河
移、海すもの所、此の而移り、と仰らる、就
左所、船の乞、水永七年戊戌の事、江戸遊學、此府
の所、海軍、遊、下、此、此、此、此、又、移、田
先生、の、所、賞、賜、法、の、所、出、来、し、た、此、後、つ、ま、素、装、し
たり。

○
空、以、す、杉、田、先、生、の、肖、像、を、由、橋、画、屋、に、下、き、出、し、海
軍、に、た、り、右、川、大、浪、一、懇、ま、ま、向、り、七、海、船、年
後、一、ま、や、り、移、社、取、法、の、出、来、し、た、大、浪、在、番
や、一、福、下、さ、れ、た、一、福、一、射、と、は、向、り、ぬ
テ、ン、ツ、ル、モ、レ、ツ、ル、手、蔓、藻、蔓、ノ、ウ、ツ、カ、ニ、生、き、
た、り、又、の、二、吸、付、く、白、丸、の、病、を、一、可、を、き、た、の、名、を

星、と、し、や、諸、雨、の、海、産、を、一、ラ、リ、テ、イ、ト、カ、一、ル
と、い、(白、貝、海、子、團、沈、玉、石、親、お、丹、洲、)考、お、其、白
平、戸、芥、川、玄、悦、廣、島、異、時、良、悦、二、後、効、字、七、書、行、を
た、り、此、れ、の、書、き、し、や、ま、を、忘、る、丹、洲、の、後、に

喘、息、為、お、二、三、分、ニ、テ、ラ、用、レ、奇、効、アリ

利、水、湧、泉、三、點、ノ、地、ヲ、奏、ス

N. XVI. 第十、七、ん、つ、る、と、片、の

海、セ、イ、ス、テ、ル、レ、ン、海、盤、車、ノ、中、ニ、属、ス、ル、品、ニ、モ、エ、レ、海、産

異、狀、ノ、動、形、ト、ス、二、種、アリ、其、一、ヲ、羅、旬、ニ、テ、Caput

Medusa、ト、名、シ、此、れ、七、ん、つ、る、其、ニ、テ、一、セ、キ、ユ、シ

ジ、ユ、ト、イ、フ、ニ、レ、イ、ス、ニ、テ、ハ、ビ、エ、ラ、ア、井、ア、ハ、安、貝、那

ニ、テ、ハ、ニ、エ、ヒ、ユ、ル、ト、呼、フ、ヒ、ツ、フ、ア、モ、(ル、ノ

土人の間エコレヲ食料トナスモノアリ甚小枝ヲ際キ
ありテ煮食フ甚大枝ノ中ニ胃脘アリコノ内ニ卵
子ヲ保ツコレヲ取り食フ殊ニ美ナリトイフ

41 四十一葉ニ詳説アリ

第十
N. X. 第五番ノ図

第一圖ヨリ第五圖ニテ「海鰐」又「海鼠」
ト名シ第五圖ノ品ハ羅甸リニアキステルチアト
名シ38. 三十八号ニ形状略説アリ

N. XIV. 第十四
Fノ符

羅甸エキニユス 和蘭パレチクレーケン 此類セイアツペル
又セルエアレシ

海鰐セイステル 海盤トノ副ニ屬スル形状ノ物ナリ
Fノ図ハ其中ノ巨大ナルモノナリ

37. 第三十七号ニ詳説アリ

N. XVIII. 第十八圖
1. 2. 3. 符 航臭タルヘキカノ品

羅甸ナウチリュス 63. 号ニ詳説アリ幸カニ讀取其略
ヲ知ルニ此物ニコフ子トイフ(キモノニアラズ鱈ノ
如キモノ此介中ニアル海中ノ動物ト見(此介ノ内
ニタコ入りテ遊クトイフワケノモノトハ見ヘズ)

原本顯名 デアレボイ也 ラリテイト カーメル
安貝那ハ印弟亞ノ一大島ナリ其海産介甲諸魚
即蟹蝦螺貝並譜及玉石等圖説ノ書ナリ 作者也

オルジウススエヘルハルジエスリユルヒウス

和蘭一千七百四十一年刻

○ 夫古人謂通達者謂通於道德達於仁義耳豈謂通乎藝
黷而達於淫邪哉 右抱朴子

○ ツルニシシニ 羊乳根 廣東人參 血止ニ妙ナリ葛根
ヲ如フレバ尚佳ナリ

○ フウトウカツカラ ツルコセウ 菊醬

○ 蕭新ヲ固メテ強堅ニス 梧桐子益智ヲ如ヘ細末

トシ用ヒテ口中ヲ清爽ニス 梧桐ハ固ヨリ固齒ノ

○ 環附 ハナガチ 苞莖衣

○ 總稱地産 死生鮮菓 物ニ性理萬殊

○ 古實集要録 廿七卷 朝廷ノ秘冊ナリトイフ

○ 牯牛卵囊 バルサツクノ名ニ合ス 竹筋

○ いづの目此いつ子セハトヤおもひ〜まこと〜の弟

○ かの身又走り

○ ゆくまきいハ花の敷にハたけぬとゆあはるば

○ ちれぬまの田舎者

○ 友田舎者ハ鏡のゐるあり

○ 我人非能生死人也此自當生者我人能使之起耳

扁鵲語

○ 吳道助附子兄弟居在丹陽郡後遭母童夫人艱 道助垣

○ 附子隱上ハ小字也吳氏譜曰垣上字處濮陽人仕 朝夕哭

○ 臨及思至窮客市有號踊哀絕路人爲之落淚韓康伯時

○ 爲丹陽尹母殷在郡每聞二馬之哭輒爲悽惻語康伯曰

○ 靖

汝若為選官當好料理此人康伯亦甚相知韓後果為吏
 部尚書大易不免哀制小易遂大貴達鄭緝孝子傳曰
 行遭母之喪哀毀過禮時與大常麟鹿伯麟居康伯母
 州刺史殷浩王休聰明婦人也麟之每哭康伯母輒事流
 涕悲不自勝伯為吏部尚書乃進用之
 此輩人後鹿伯為吏部尚書乃進用之

○ 紫根壯陽湯 水府秘方 瘧疽要藥一說諸痔通用
 常飯 為菜 金銀花 紫檀 五倍子 大黃
 牡蠣 升麻 黃耆 紫根 各二錢 其性 壯子

○ 五福 富 壽 康寧 攸好德 考終命
 理脾湯 產後停食胸膈飽悶身發寒熱不思飲食
 蒼陳 厚 縮 麩 檀 芽 等 耳

福島南條三軒試効

○ 遺尿

氣海 五十炷 曲骨 橫骨上毛 二十七炷
 陰陷中

十四椎 腎命 命門 二十炷
 腎命

右諸穴ヲ寐シテ一ニ灸スル一七七日或ニ七日極
 テ効アリ

○ 甲子散 梔子 百草霜 牡蠣 黑砂糖

○ 右四呆為末以米酢和塗患處更時則煮茶ニテ洗之

○ 冒被 累胃 覆胃 ベケレトセルノ説名ニイカド

○ 嗽可考カ一ケニニハイカド

○ 貝多算 あんざり シロボウ口モチハチカルプキク

とハハあり

○ 葛西園 古唐門 紅蕩士

○ 陰中搔痒 洗菜 夏枯草 山拖子

○ ウイッテ 揚 ウイルゲ コルルハスト 同効ヲ為ス

○ シニルハ 黃栢

○ ハレリアナ 穿心排草

○ 蓼萸 野葡萄 五ビツル 紫葛 イヌエビ 根治腫痛 葉

クスリモゾサニ用フ

○ 林簫 一名信篋 字直民 號鳳岡 春齋男初 稱春常 八十九

髯卒

嘗詣貴戚主人固重鳳岡乃死與坐款語時天寒鳳岡喫煙且傲然曰老人頭冷不得不用巾即取諸懷中著之既而主人拊鳳岡背曰膚理潤澤矍鑠哉老翁也鳳岡曰肩

○ 下作痒少伸手搔之主人又曰寡人敢請一言可乎鳳岡

曰唯第^此比^丘此時有市街比丘尼賣^此語^此故^此理^此言^此謂^此好^此色^此為^此

與世民間俚言以玉門呼做比丘為當時流言

○ 新序曰孔子見宋榮啓期年老白首衣弊服鼓琴自樂也

啓期曰吾有三樂天生萬物以人為貴吾得為人一樂也

人生以男為貴吾得為男二樂也人生命有傷夭吾年九

十餘是三樂也貧者士之常死者人之終居常以守終何

不樂乎

○ 訖苑曰晉平公問師曠曰昔年七十欲學恐晚何如對曰暮不炳燭耶臣少而學者如日出之陽壯而學者如日中之光老而學者如炳燭之明炳燭之明孰與昧行乎公曰善哉善哉

菅野惠迪主方 宇田川

(子チア石鱸 十錠 煮牛胆 一錠)

半隻 五錠

右丸トシ毎丸一錠銀箔為衣午時ニ四丸夜四丸ヲ服ス此丸ハ自然膽液ノ性功ヲ体中ニ為ラ標的トス

○按ニ右小兒ニ此ル分量ナリ大人ハ倍ノ可ナラシ

○祇南海サウリ時四方ニ漫遊シテ居所定ラズ長崎

丸山ニモ尋アリシ云ウニ帰ルニ多クハ此ノ時

ハ清ク作リシ人ニ云セシトモ

二十餘年漂泊身披菴糊口全不負世間若問昔名姓

柳巷花街月人

○ゴス 陶説トイフ書ニアル黒楮石 物理小識ノ画燒音

ナリ此湖菜ノゴスナリ

燒物ニ出サテ手トシテ其ノ皆粗末ナリ

○サルホレイケレスト

煖硝 醴ニアリテ音ニ 硫黃 各等 加大黃同量ヲ加フ

○排空理而尚実効

○品胎

津輕弘前新寺所白狐寺門前住居足輕目付赤坂某輩

三十余歳 文化十年癸酉二月朔日朝出產 初産死

胎第二産三日目死第三産六月程ノ 胎見ユ 第四産三月程共

死胎ナリ産後胞衣下ラスシテ四日目ニテ死ス

掛合齋師 古部道策 和野玄俊 杉野因策

所齋師最初ニ診フ傍嶋道碩

○ 珥鍋

字彙珥土器也

珥鍋

烹鍊金銀器訓蒙字會

埴全上

鎔金 銷金 鍍金

拾遺 兼盛

世のやにうれしき物の思のよき花見てまらぬ
公何のり

源後松乾臣

春風の浪や幾とんみちのくのまのきの島の松

の花貝

延槻川

越川新川郡

萬葉集

マのグトホーニフ一名ヒツハルカニフトヤシ大陽

ニハ自然ニ流レ出ル白雲ニハ雲ニ出ル元未登ル蟬

と水混レましり何湯ニ沸レ沙濁くまり物之也

是ハ尋常ノ所ニ出ル蟬ノ第一ニ大陽中ニ蟬ノ登ル

と自然ニ名レ流レ滝ノ山何ニグトホニリと

ヤリ至レ上ノ所ニ充テヤリ白雲鳥登登ル何レヤリ

東禅寺初堂 伊達安藝

見龍院殿前藝州刺史徳翁収澤大居士神儀

奥州仙臺涌谷城之主伊達安藝藤原宗重世壽五十

七歳而 寛文十一祀辛亥三月廿七日於江城幕下

酒井雅樂頭之宅為主君松平陸奥守綱基之忠死是

帷屋六左衛門位牌

小槻 宿称

五世奉親 初奉官称 コレヨリ 十六世

今雄

官 景實 長寛兩職事被下給旨於隆職以來官務職
 相續之 三博士者被付廣房流相續之
 廣房 博士相以下 伊治官正五上 二テ諸家大
 系因ニ系アリ 編纂本朝尊卑令脉因

特進亞槐藤公定撰

○ 明和中之テカラをアチキモニ一ありと平松氏物

若野之口メ
 平松氏大和ヲ見出シ大カラス日充ツ

○ 氣仙郡五根村藤原氏占七ノ氣仙郡用金為時ノ段

統子ト葛西三拾二騎の内あり 片家ニ鏡現餅
 玉竹物ありト焼失セリ

○ 膈病奇方

ハ、ツの薑汁を耳にあり抄へすりて包服せよ

高知あり

○ 雞鳴散 打撲 大黃 杏仁 等分 水煎

○ 筑前物産家 鞆橋善兵衛

○ フロイ子ラ 除州夏枯草

○ サリカニ 利水ノ大功アリ 靴五具の上ニ坐るをウカ

らニ乾す 復カ肉身ノ柔あり 一味為細事小兒ニ
 用七効あり 二夜色を失むる等アリ

○ 甲州櫻梅根の上ニ土車草とシテ物を坐る小兒諸病
 又効あり

○ 京庭所贈 吐酒石塩 沈痼眼疾ニ奇効あり

○ 銀坐所伝 名ヲ来文化ト云フ 銀子目録 玉金 玉洞

此亦有力ナル事あり

○ キンドルポツク 羅 *Varicella or Navelle*

○ バルセルムゴツパイハ 湯ニ投シ用ヒタルニ粘物ヲ下利ス

○ 岩疾ノウインド覺ヘバシテ治ス

○ 稀粘丹 アレドウルルンガリイ カンテイツイニル

○ 辰砂 右三味 頭痛 氣鬱 氣付 婦人積聚 小思引ッテ

○ 老後述懐 翼

○ まゝゝゝ初てありと知うれし世のさう河とく

○ 老の身と終はうけれ

○ 紅 ミツグリニヨルテトリ三合縄

○ 上杉弥五郎後畠山蓬菴 畠山牛菴

○ 謙信の政武人風雅の人あり

○ 楓子 龍籠手盤目楓埴作手材

貝原損軒 和爾雅 第五十三丁

○ 人奥塚 備中ニアリ

○ 橘菴醫者閉門蘆菴上場醫者飯郷

○ 堅田彦子 官部不梅賞漢雲束信筆の上ニ席目詠

○ 花よりぬき名てふとてか子之は壽也

○ うゑのあやをの園名おめりえ

○ 西取發

○ 松瀧 音詣火燒松枝取液也 木綱

○ 唐山より渡る干ヤンハこれこそ干ヤンハ瀧の唐

○ 音かの日

○ 瀝青 李煜 松脂別名 番瀝青出てもよ

○ 栢 枝節燒取諸油療瘡疥及患癩良 蘇恭

あられの諸油いりしチヤンあると
ペツキピツキ羅ピツキス 脂水ヨリ滴流スル脂
膠ナリ スワルトペツキシケープスペツキ
スワルトニケルスペツキ Δテール

○ 梶カ白 セイロップ
○ 滝茶 糖鍊滝茶膏

○ 秋玉山詩 雪裏梅紅三老閣雨申松緑二仙臺

○ 五城志村氏考 三老閣ハ三ヶ所ノ古梅園旧市城
址小泉所殿 辨麓梅屋舖所殿 右三ヶ所在朝鮮
梅をいりぬ梅の古本を持多し 二仙臺ハ市本丸
所ニ九所ニ代振ハ市邊常玉山真摺の句あり
○ 瘡 不同淺深強弱通用 東洞治驗方

柴胡 黄芩 半夏 桂 附子

○ 瘋病 楯林榮哲傳
ドルシス 斟酌病毒淺深 友龜 大黃 角石
右糊丸

○ 禁口痢 粟本氏傳 カラスニ 味噌汁ニテタキ用ヒ効

○ 頭痛方 石膏 大川芎 中細辛 中 麩晒米粉 中
アリ 見枕痛 亦効アリ

○ 沃雪法 石膏 十枚 竜腦 苾稍 各一枚 茸艸 一匁
右四味糊丸六七分ツ、白湯送下婦人ニハ川芎ヲ極大ニス

○ 羊脂 明菴ニ和シ指甲皴皴皮ヲ生スルモノニ塗リテ
良シ 羊脂明菴女子乱髮霜ニ味合和シ轉筋或

脛脚舒緩屈伸スルヲ能ワサル者ニ塗リテ効アリ又羊
脂ヲ^レインセンシエレン^ノウエ井^ニ酒ノ内ニ投シ煮服
スレハ赤痢及咳嗽ヲ治ス

右西醫シヨメルノ書ニ出ツ

○ 治疥癬法 サレシホール

硫黃 透明上好者八錢 白砂糖 四錢 硝石 二錢

右為細末每服八分

疥癬膏 スウエイテン

硫黃 廿二錢 硃砂 四錢 猪脂 六十四錢 右合為軟膏○

此膏疥癬之者殊有良効

疥癬經驗方 毒法

土茯苓 杜松木 槐木 右三味為煎劑不大便者

加大黃

右之法近來試用此膏甚効驗有之其症覺申
膏中硃砂ハ常用ニモ去リヤレ片之有疥癬細
乾キ痒キ多キニモ殊ニ効驗有之其症覺申
膿ヲ持チ痛強キニモハ常用ニ入リヤレ片之有疥癬
經驗方

○ 問曰其初起發楊梅瘡之時用何法治之曰若其患者

稟受多血者先治其有糸之血二三日後宜服後方

エキスカラキカトリコム 四分一厘余

メリカリスドルニス 一分六厘余

右加琥珀油適意為丸服至八日即愈

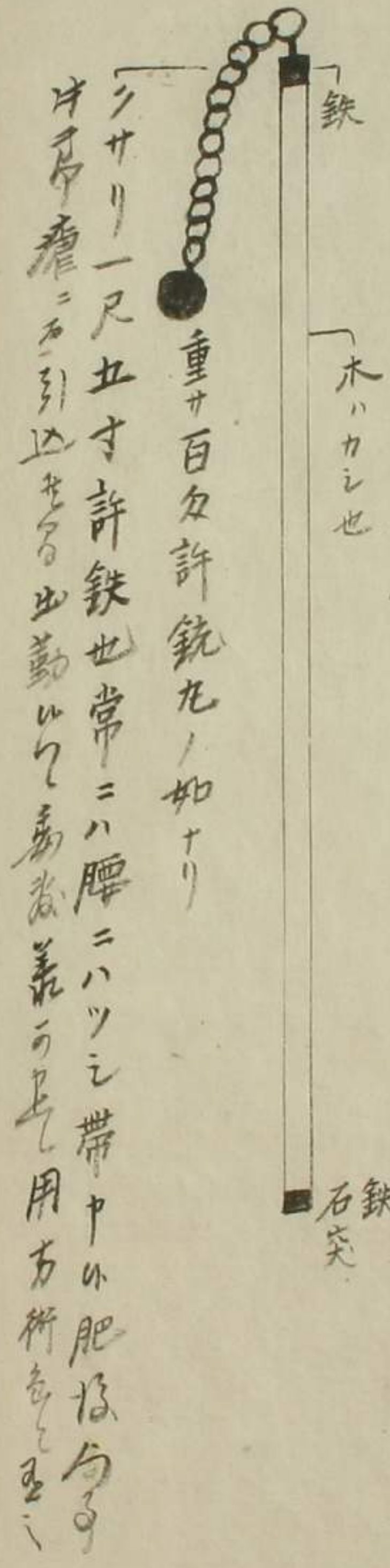
問曰服前劑取淨下之後何方治之曰服前劑後宜服後

方每日二次早服空心晚強食後一時服之早晚計共六
十四次或八十次如其溫暖宜任患者意

ポットホウト割 三十二分
ポットホウト皮 割 十六分

右二味共入罐内加温湯八斤安石爐邊浸一宿火煮
半時或一時許後加割耳中十三分再煎令清澄即取
服之又取其滓加水四斤煮過本滓終日任意服之

大四尺五寸許常ニ六枚ニ用ルナリ



在邊の如し

在邊の如し 術ニ對シテハ大ニ得ルニ在業也

菴羅菓 吐食病

鯨鱗 皮 ケツスル発泡篇

紀州銅山 キンルカス 百六十匁一斤銀三分

スモンゲンウラルテル 真細辛

艾 別録 サシモクサ ツクロインサ 与毛岐和本草
中品 和蘭ベ井フート ト、ニエース本草

王安石字説云艾可又疾久而弥善故字從又頌曰初
春布地生苗莖類蒿葉背白以苗短者为良云々時珍
曰多生山原二月宿根生苗成叢其莖直生白色高四
五尺其葉四布状如蒿分为五尖極上復有小尖面青

背白有茸而柔厚七八月葉間出穗如車前穗細花結實累累盈枝中有細子霜後始枯云

蘭山曰原野短小者其佳也淡路もくさ良江州伊吹山の

艾煙小くして香氣甚故其熟艾最上品とも因て片も世人伊吹もくさ河上もくさも但今通用

伊吹艾ハ一名ぬまよもき昂蕙蒿也白蒿條時珍曰生波澤中

二月中發細葉似嫩艾而歧細面青背白其莖或赤或白其根白脆采其根莖生熟蕙蒿皆可食蓋嘉蔬也

高十一丈餘長大くして香氣少く艾とは大に異なり元利白魚有り此貝原氏曰モクサハ嫩葉云江州騰吹山の多日光山の標地原の艾とも中ニまゝのものと有る

○ 骨鯁

寺嶋東馬傳 横田トゲヌキ妙方

ニハトコノ合皮 土用中ニ取 白花鳳仙花仁 茸草

右三味等分竹管ヲ以テ咽中ニ吹コム乍チ出ツ他竹水簽刺ニヌリテ其刺抜ケルナリ

仙臺ニテ水ノサ、シレヲサチラトイヒサチラヲ立タリトイフサチラサルモノトイフカサハ刺ルハ物トイフニヤ刺トイフカ可考

○ 第十九号

猛升赤丹 二重一毛九九九亞辣比設護母 一々

井水 九十六年 此ヲ硝子或ハ石ノ白内ニ子細ニ摩大 此方淋瀝着ハ白帶下ニ注射ス予徽毒淋ノ瘞

閉ヨリ起ル所ノ眼目ノ焮腫ニ此方ヲ以テ眼ヲ洗ハシム

然此眼及口尿道モ一併列症年ヨリ多クノ猛升系丹
ニ耐ルヲ能ハズ此方ニハ其ノ瘡ヲ加交シテ梅瘡
ノ外浸劑トシ及ヒ其病ノ咽喉ノ瘡ニ含嗽劑ニ用
エ又鼻蹊腫及ヒ^カカルク^レボイ^レシ^レ皮膚ノ梅瘡ノ類
ニ此方ヲ煎蒸劑トシテ罨貼スベシ

第二号

淨潔生水銀 一匁 亞辣比設護母末 三匁 甘蔗 二大
黃ヲ加タル舍利別適宜ヲ取テ摩シテ能ク調和シ
水銀ノ全ク泥トナルニ至リ此ニ白蒸餅中心四匁ヲ
交エ丸ト作スニ宜キモノトナシ此ヲ三幣列應 四厘
ハ毛丸丸ノ丸子トナシ甘州布ヲ衣トス此ヲ朝夕
十丸ヲ用ルヲ概トス

用法此丸ハ前方ヲ服スルヨリ容易ナリ是故ニ予
比年既ニ毎ニ之ヲ用テ良効アリ

○白雲水 土佐ニツキト呼フハ誤リナリ

枝葉全似枳椇枳椇葉圓枝入復脫皮抽莖長六七寸花
色白且瓣黃蕊二三寸葉累々滿條恰似白藤花不垂子
圓 此花戸稱麻桿者之一種

○土佐ニツキ一種之灌水

○治勞瘵 服部宗賢方

- 柴胡 芍藥 半夏 枳殼 前胡 地骨皮 蘇子
- 桑白皮 杏仁 麥門 鼈甲 瓜呂根 細葉水蠟樹
- 耳草

治虛勞 イボ夕蟻 一匁五分 耳草 右水煎服

○凡を病といふ者、人々稟受の本性異なる有り時、寧ろ
 頗悪く有り有り、夫人々の性自然、聲者、清濁あり
 り飲食、^{スチンシ}好悪、^{コシヤリキラヒ}衣服、厚薄あり、物て身軀の舉
 動、^{コシヤリキラヒ}干乾、^{コシヤリキラヒ}端あり、賢愚といひ利鈍といふ、これ、
 係り、^{コシヤリキラヒ}色し、若彼と此と其差、^{コシヤリキラヒ}とま、^{コシヤリキラヒ}而を一癩といふ
 病、^{コシヤリキラヒ}凡一癩の長、^{コシヤリキラヒ}左の有り、其常癩、^{コシヤリキラヒ}ある、^{コシヤリキラヒ}吾病、^{コシヤリキラヒ}在
 の人、^{コシヤリキラヒ}良、^{コシヤリキラヒ}流、^{コシヤリキラヒ}健、^{コシヤリキラヒ}運、^{コシヤリキラヒ}の人、^{コシヤリキラヒ}有り、^{コシヤリキラヒ}ある、^{コシヤリキラヒ}此、^{コシヤリキラヒ}より、^{コシヤリキラヒ}多く、^{コシヤリキラヒ}其、^{コシヤリキラヒ}癩
 あり、^{コシヤリキラヒ}人、^{コシヤリキラヒ}稀、^{コシヤリキラヒ}あり、^{コシヤリキラヒ}性、^{コシヤリキラヒ}急、^{コシヤリキラヒ}の人、^{コシヤリキラヒ}必、^{コシヤリキラヒ}も、^{コシヤリキラヒ}癩、^{コシヤリキラヒ}者、^{コシヤリキラヒ}狂、^{コシヤリキラヒ}乱、^{コシヤリキラヒ}と、^{コシヤリキラヒ}有り、^{コシヤリキラヒ}性
 遲、^{コシヤリキラヒ}懶、^{コシヤリキラヒ}惰、^{コシヤリキラヒ}の人、^{コシヤリキラヒ}多、^{コシヤリキラヒ}腫、^{コシヤリキラヒ}或、^{コシヤリキラヒ}癩、^{コシヤリキラヒ}病、^{コシヤリキラヒ}と、^{コシヤリキラヒ}有り、^{コシヤリキラヒ}其、^{コシヤリキラヒ}推、^{コシヤリキラヒ}て、^{コシヤリキラヒ}考、^{コシヤリキラヒ}ふ、^{コシヤリキラヒ}一、^{コシヤリキラヒ}し
 大、^{コシヤリキラヒ}抵、^{コシヤリキラヒ}人、^{コシヤリキラヒ}病、^{コシヤリキラヒ}者、^{コシヤリキラヒ}あり、^{コシヤリキラヒ}若、^{コシヤリキラヒ}し、^{コシヤリキラヒ}と、^{コシヤリキラヒ}臥、^{コシヤリキラヒ}蓐、^{コシヤリキラヒ}は、^{コシヤリキラヒ}就、^{コシヤリキラヒ}ぬ、^{コシヤリキラヒ}とい、^{コシヤリキラヒ}ふ、^{コシヤリキラヒ}事、^{コシヤリキラヒ}あり、^{コシヤリキラヒ}
 皆、^{コシヤリキラヒ}病、^{コシヤリキラヒ}と、^{コシヤリキラヒ}辨、^{コシヤリキラヒ}と、^{コシヤリキラヒ}持、^{コシヤリキラヒ}ち、^{コシヤリキラヒ}ち、^{コシヤリキラヒ}の、^{コシヤリキラヒ}裏、^{コシヤリキラヒ}あり、^{コシヤリキラヒ}内、^{コシヤリキラヒ}傷、^{コシヤリキラヒ}亦、^{コシヤリキラヒ}感、^{コシヤリキラヒ}と、^{コシヤリキラヒ}此、^{コシヤリキラヒ}の、^{コシヤリキラヒ}若
 あり、^{コシヤリキラヒ}とい、^{コシヤリキラヒ}一、^{コシヤリキラヒ}と、^{コシヤリキラヒ}皆、^{コシヤリキラヒ}若、^{コシヤリキラヒ}性、^{コシヤリキラヒ}の、^{コシヤリキラヒ}指、^{コシヤリキラヒ}前、^{コシヤリキラヒ}加、^{コシヤリキラヒ}る、^{コシヤリキラヒ}有り、^{コシヤリキラヒ}左、^{コシヤリキラヒ}、^{コシヤリキラヒ}差、^{コシヤリキラヒ}温、^{コシヤリキラヒ}は

力程よく場（飲食）よりきりひかく恒よく働り
 き氣より有り人おも若流り病あり、^{コシヤリキラヒ}保、^{コシヤリキラヒ}つ、^{コシヤリキラヒ}や
 と知、^{コシヤリキラヒ}考、^{コシヤリキラヒ}ひ、^{コシヤリキラヒ}左、^{コシヤリキラヒ}も、^{コシヤリキラヒ}也、^{コシヤリキラヒ}

○猪膚

喻昌曰猪膚者猪厚皮去肥白油者也白粉白米粉也
 錢潢曰猪膚一味方中向未注明以何者為膚致使前後
 註家議論紛然若異如吳緩謂焯猪時刮下黑膚也方有
 執謂本州不載義不可考說者不一用者不同然既曰膚
 當以焯猪時所刮之皮外毛根之薄膚為是王好古以為
 猪皮尚論云若以焯猪皮外毛根薄膚則蒼蒼無力且此
 熬香之說不符但用外皮去肉層之肥白為是其說頗通
 若果以焯猪時毛根薄膚則薄過于紙且与垢賦同下熬之

有何香味。以意度之。必是毛根深入之皮。尚可稱膚。試觀
刮本毛根薄膚。毛斷處。毛根尚存皮內。所謂皮之去內層。
極為允當。正珍曰。按儀禮燕禮有內羞。註云。羞。籩之實。
稊。餌粉資。疏云。此二物皆粉。稻米黍米所為也。釋名云。粉
分也。研米令分散也。合而考之。白粉即米粉。喻昌說是也。
熬香二字。特於白粉言之。喻昌兼指膚說之。非矣。錢潢以
白粉為粟粉。亦非矣。

○長州能美玄頰傳方

温中丸 下血以後方送下五十九丸或百丸以多為宜

蒼朮 陳皮 青皮 厚朴 三稜 菽述 香附子

各五 耳草 五分 青礬 十二分 針砂 二分

右九味為末酢糊丸

加減胃差湯

蒼朮 陳皮 厚朴 猪苓 澤瀉 茯苓 藿香

羊夏 大腹皮 三稜 菽述 山查子 青皮

車草 蘿蔔子 右十二味水煎

指迷七氣湯 積聚心下悸甚者以此湯下前丸

三稜 菽述 陳皮 青皮 桔梗 藿香 香附子

益智 桂枝 車草 枳椇子 大黃

右十二味水煎

歸命丹 勞咳 栗山華菴經驗方

天石 麥門冬 生地黃 各二 麝香 沉香 黃柏

縮砂 青皮 辰砂 各一分 黃芩 知母 各三分 芍藥

川芎 黃連 木香 柴胡 各一分 厚朴 各三分 犀角 各一分

香附子二十目 右十九味為末齋煉或糊丸

勞瘵 千金一方

今名柴胡 蟹甲湯

柴胡 為茶 蟹甲 花蕊 枳實 人參 大黃

耳草 右八味干煎

○

壬戌夏の江出羽の新左郎の病一為毒に注瘡に成り
くは其毒より大久保勇といひ白くは立りくればと
持此毒より来りてこれにすかきりて其毒は消きりて
一人の不見病友の江生れ出りて指は赤くつら
まるとも見難うれぬ病に中病嬰見の因にま
為すくま器の齋法に好施しつらきとありて
あつりくすておられずとややめる但見おされ
を病氣にきき若く喉の因せいにいひくくるにげ

お見申の病といひてはこれに何個の面色も赤白の
をげは白くすくくる見(利)やく唾科は注し赤
濁しもしもやれをまがたく思ひありて病又思ひ何
なりし粉毒のあれ先つそれを病にやれぬ病に
はひの収りしをといひももとるに粉毒即蝦夷
地を産するイケナありて此を漢名の中皮消。白兔
齋ありといひて和蘭の毒をメコアカンと呼ぶ其
後何讀むは濁液に分利して微利毒にむるの物あり
姓は小思の病は毒効ありと後けり其毒中の物あり
まや一石のウイット。ラバル(ル)とを白大黃の粉り
まうりしを喘氣病定有物ありと云ふと毒はれはし
と何名を病にきき(毒)ぬ夫(毒)二三度

○

海域大觀 戴高履厚蒙求嘉慶丁卯鐫 恕堂 徐朝俊

日本長三千二百里寬不過六百里國主居山城往擁虛名每州各有主強則為霸大類中國春秋時俗尚強力民多習武

中國在亞細亞州東南南起瓊州出地十八度北至開平等處出地四十二度從南涉北共計二十四度徑六千里東西大略相同

坤輿格致臺郡雜誌

○兩陰異稱

兩陰の稱謂和漢今古の異名方法ありは傍ら遠西の所呼は至るまで於聞見は後ひ漫録也

見るもの星を不典とするをわかれこれお博物の一端あり

男

日本

篇乃古 日本靈異記 奈良朝の書此層

中寶 古今著聞集 狂言一稿檢校曰今はちんちん

見の堂をちんちんといふ中寶のまの唐音の白

より 祖來りあり

破前 一云麻前良 日本靈異記云純伊國伊都郡有一

類聚抄二信閑 凶人不信三寶死時機著其閑和名

輕破前 伊勢貞犬日陰のかつりの中又載す和名抄 蓋垂類は房内經云玉莖楊氏漢語抄云原注

云破前一云麻前良云貞丈按子麻前良を略し
麻良と云ありかつををかたうと此畧を

馬傷 釋尊馬陰藏相と載義楚六帖 本朝弓前直鏡
馬陰出下學集物と大者為馬

まうたけり草 藩羊薈 和名抄 ○陽物を勃起せしむ
片たけり猛子長けり義と勃興の意をいふ按子
たけりはるむとたけりといふたけりの用を人の
白へたけりといふよりたけり草の訓はこれに人の
勢もたけりといふより

くき ざくぞう
てれつく

かり 俗語をいふ或云物と出入往來する物の事と
かりといふはと借倒の類ありと
さ月 形を取て竿といふある也

り 麻良の上畧

錠口 馬口かり錠頭と似たる名あり也

あし見 〇あしこし見 奥掛
ちん不し見 〇ちん不こし見

北俣 蝦夷

たけり 陰莖

漢土

陰莖 陰 譯名云陰 幹玉莖也 玉門 陰也 陰所

外腎 本州 男陰 男根 陰物 前物 莖物 勢 刑徳

丈夫 藩 割其男勢 血子雷切又即香切老子合而蛟作註

峻赤子之 腕音管人 帚切了 屎渠尤 屏力丹切
 命系也 陰男陰女 廢陽器 中靈 玉莖房內 屏閨人謂
 陰總名五篇 懷胡公獨無 肉具 淫具 三國志 陰核食療
 玉莖元首 懷音囊 人勢本州綱目 陽物 屏核食療
 食蔘及生 核俗之 陰人勢 雞巴俗語 莖 陰頭 馬口
 核蔘 肥正音 陽節共二 雞巴俗語 莖 陰頭 馬口
 包皮 陽具 閨風名色

陽物 肉蒲團 紫標槌 子孫椿 石點頭 擎天柱西洋記
 塵柄 如意君傳 蚌殼槌 柳齋函卷一笑笑府又作
 大龜 水滸傳 廢子廢與廢 亂綉榻野史 亂筋全細卵
 貨水滸傳 教曹則天 雞巴肉蒲團 駝兒大的行
テイサキノコ 鬻綉榻野史 雞巴肉蒲團 駝兒大的行
肉蒲團 大キナ 教曹人名 敬物笑曰

吳中諺言男根為敬物カノモノ 童男子 云チンポノイニ 笑林
 大截還說甚 廢童男子

和蘭

ニン子レーキ一ド 陽物總稱男ナルベキ證記トナルベキモノ
 テールデーレン 滋生ノ原ヲナスベキモノトイフ意
 テールリット 滋生ヲナスノ一物ノ義ナリ
 ニン子レーキ ルーテ 男ナルモノノ鞭トイフ義 鞭ハ莖ノ
 意ナルベシ 單ニ「ル」テ「レ」トモ稱ス
 ○ホーフド 頭 ○ホールホイド 包皮
 諸厄利亞
 ニンズ井アルト

カウリス 陰莖
 羅旬 Penis, coles, fascinus virilis.
 Caulis manegardii.

membrum genitale in viris superius
 Develum, vagina, 此等キリキス、ラテシ諸名フランカルジノ
 キシコンメジキ、ノ、ニヌ、條ニ出ヌ

魯西亞

ホーイ

千イシカ ヨ見ノ莖ライフ

安南

コシカ

女

日本

美蕃登

古事記大山津見神野稚神二神因山野特別
 而神次生此子美蕃登速見炎而病丹在多具
 亦名一理迹生神註陰此謂不〇ほど和訓禁保之部神代

不

記日本信とよめ火戸の義前信の義の発すり所
 郡吉田村古事記〇美之上の武人乃姓名は女陰四高市

不

冊のあいうえおのまじりや〇陰根をまじり神射とせし
 山根の神と苦集滅道金勢神とてあるとを徳天王の信

不

新猿蓑記 持又留ミコイノ事

匏苦本

和名新莖垂類 貞天母は女陰あり
 雄長老慶儀狂歌百首和泉といふ類も世と在り
 部。や洗ふらん動すほいつの木の水にくさるよ

木塚者属
玉門已婦
者属龍門
已産者属
産門

按上總の方言の存もこのいふあり○童蒙先
習の載も漢四百七年のんがをり毛の
玉門 通鼻 和名抄。按つたりの義
比奈佐岐 和名。按つたりの義
吉吉 比奈佐岐 和名。按つたりの義

一、 此名と通ずる和訓皆殊名あり今奥羽北哉専ら
一、 此名と通ずる和訓皆殊名あり今奥羽北哉専ら
一、 此名と通ずる和訓皆殊名あり今奥羽北哉専ら

おろ 一、の物音促呼り
おろ 一、の物音促呼り
おろ 一、の物音促呼り

北倭

ホーツキ 陰門

漢土

陰男 幽隱 女陰 陰戸 朱門 陰門 玉門 房内
門陰 玉戸 牝 牝 産門 産戸 陰溝 龍門 經玉
右也 溝屋陰 隱處 人道 婦人 陰門也 毛詩曰 横 屍
属 善秋切 屨 吉舌 楊氏漢語秋 也 女陰 人病 体兼男
形 二 人門 子門 龍門 閨 屨類
陰物 陰戸 物類云 女 陰門 牝 又 眞 陰史 屍 類云
小説稗官俗語所録 閨 屨類

陰門 胡天蓮 石點頭 衣舒花 全 排皮 勢揭野史 排同 破同
小排兒 ヤニイガ、 寬排 笑府 花心 肉蒲團 雞舌 サ子

和蘭

フロウレーキヘード 陰門 女ナルベキ證記トスルモノ、義ナリ
フロウウエレーケ シカールメル 女ナルモノ、ハデトコロノ意ナリ
シカールメル (ヘード) ハチラウベキモノ、義ナリ可耻處耻處ノ
キツト 義男女共ニ通稱ス

ゴウス 漢大ノ義ナリ
ゴロート スプレイト 綴ニ縫裂セル全状ヲ云フ大裂
早言ニたつめれと
ヘウ (ルチイ) 綴ニ縫裂セル堆ノ義ナリ ○ヌ キツテラール
ハコレ 肉囊ナルモノ、義ナリ

ハルイルナート 毛際
リップ 唇

ヘニスベルグ 兩側隆起ノ部

内部諸名畧ス

諸厄利亞

ウラニス プリアイパルツ *Monand periparty,*
羅甸

拂郎蔡

魯西亞

ピツタ

コンカハヤノ傷ヲイフ

安南

ロレン

Handwritten text in Japanese, including the characters '安南' and 'ロレン', with some faint bleed-through from the reverse side.

